

“中山間集落における
救世主『ぐるみ型集落営農』“を目指して
— “みんなで協力 一農場” —
平田村役場産業課
主査 大方 憲一



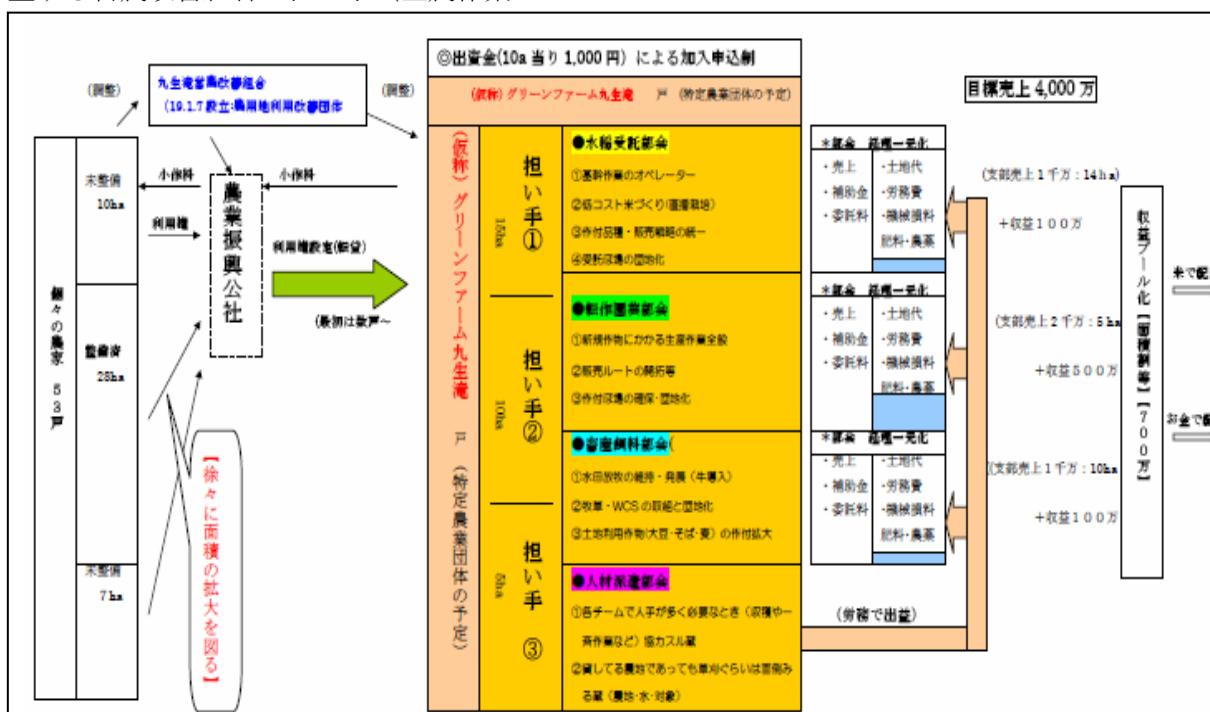
平田村にある九生滝集落は、阿武隈山系にある典型的な中山間集落です。本地区では現在県営ほ場整備事業により地域内の約6割の農地面積にあたる30haの区画整理を実施中で、当初農地集積については担い手3名により計画したが、将来の大型機械更新や営農利益を考慮すると、条件が不利な中山間地帯での個別農家による営農は将来行き詰まることが予想されま、数十回にわたる相談会の結果、発想を転換し、専業農家の担い手だけに集積するのではなく、集落内農家全戸が参加する営農団体をつくり、個々の生活収入形態を変えずに、現状農業の赤字軽減を最大の目標にしたぐるみ型集落営農を目指すことが、本地域での持続可能な農業の“かたち”であることに意見がまとまりました。そして集落全戸が加盟する営農改善組合の担い手（全農作業の

受け手組織）として『グリーンファーム九生滝』（受託面積約12ha）が設立され特定農業団体の認定を受けました。

まず営農組合をつくり、相談、検討をする①会議の場をきちんと定期的に設け、②現状の把握と問題の根源はどこかを探り、③地域の将来図をどうするかのイメージを提示することが重要です。今後は会議を重ね、少しづつ農家の発想を転換させ、合意形成を図る予定です。

九生滝地区の場合、ほ場整備がされ、推進事業などによる、新規作物（アスパラガス）の実験栽培等もできたことが切っ掛けになっています。

今後の課題として、『グリーンファーム九生滝』は設立したばかりで営農の実績は1年もありません。集落全体においては、まだまだ認知・広報不足ですが、グリーンファームの事業初年度となるH21年度の営農活動により集落PRを続けていきたいと考えています。



JAグループ福島県域営農センター・福島県水田農業産地づくり対策等推進会議

(福島市飯坂町平野字三枚長1-1 Tel 024-554-3072 Fax 024-554-6022)

http://www.fs-suishin.jp/04_doc/04_vision.html

畜産の飼料自給率向上を目指した体制づくり

J A東西しらかわ
営農経済部
営農経済企画課
課長 後藤正一郎



平成 20 年度における当 JA の稲 WCS の収穫面積の実績は約 50ha (生産者 65 戸、約 740 t) と本事業に取組んだ前年度 (平成 19 年度) の 10ha を大幅に上回りました。

専用機械は平成 19 年度と翌年にそれぞれロールベーラー、ラッピングマシン、グラブの一式を購入し、2 台の収穫機械を稼動させ、収穫を行いました。

JA が機械を購入し WCS 事業に取組むきっかけは、畜産振興策、特に飼料コスト低減策として水田を有効活用できる事業であることでした。

自給飼料の確保を高め、産地づくり交付金などにより水稻所得並みの収入を得ることで農家経営を安定させるものです。WCS 生産に JA が直接取組むことは事例も少なく大きな挑戦でした。飼料高騰により脚光を浴びた稲 WCS ですが、飼料産地が見える自給化は安心して給餌できるものとして、今後は飼料米なども組み合わせ、自給率向上を目指した JA 事業として取組んでいく予定です。

ここに当 JA の主な取り組みをご紹介致します。

□ 平成 20 年度の主な取組み

- 飼料専用種の作付：夢あおば、べこごのみ等
- 生産コスト低減支援策：カルバコーティングマシン導入（県単）
- 直播機（8 条）導入（国庫）
- WCS 収穫専用機の導入（国庫）

□ 平成 20 年度の課題

- 面積拡大・広範囲による機械の移動等 作業効率性低
- 圃場の排水性、生育不良、雑草害による収量・品質低下
- 単位面積あたり収量の増加法
 - サイレージの一個当たり重量の小型化の希望
- 販売単価の今後の見通し等
- 平成 21 年度の主な取組み案
- 直播をはじめ栽培法の再確認と周知
- 圃場条件改良：排水対策、除草
- 飼料専用種の作付と栽培指導、作業性向上策としての作付品種の団地化
- 品質改善策としての実験者及び関係機関との連携

□ 取組体系（コントラクト方式による作業体系）

